

官房第四〇三十四号

主事



淨馬

校合

御用印

十月廿二日



年月日

主務

立案者

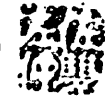
大臣 次官



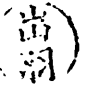
軍務局長



造船課長



軍需課長



人事課長



訓令案

来月十月八日軍艦明石進水式舉行 自依仁親王

殿下御差遣候旨

事所按相候旨案此旨心得し

昭和二十年十月二十一日

海軍大臣

二

海

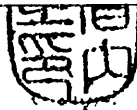
軍

紳

1653



軍務局



官房第 四〇三二

軍事課  
送給課

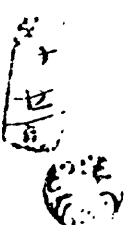
来儿十一月八日横須賀造 江廠に於て軍艦  
明石進水式與奉行に付依仁親王殿下  
同行被差遣候旨 淺沙法相成候條  
此段申進候也

明治三十四年十月廿日

宮内大臣伯耆守土方久元

海軍大臣佐野常武卿行遣候

進言候に由生傳之に御座候に貴官より直に御之  
に申上者之に及此段添付申上候也



1655



軍令部長 (代)

第一局 (兼)

主事



校合

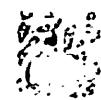


淨寫

年月日

主務

十月廿日



發日由

立案者



大臣

次官



軍務局長



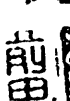
軍需課長



兵備課長



兵隊課長



指令案

橫領第三三五七号ノ七軍艦明石進水式時刻

書更ノ件認許ス

明治三十二年十月二十七日

海軍省

二

海

軍

横鎮第三二七號ノ七

立紙課

松

軍艦明石進水式時刻変更之上申

新造軍艦明石末ル十一月八日午後三時三十分進水式  
執行候旨横鎮芽三二五七号ヲ以テ具申候処潮  
時都合ニ寄リ今日午後三時執行致度候條此段  
上申候也

明治三十年十月廿五日

横須賀鎮守府司令長代理

海軍少將東郷平八郎



海軍大臣候爵西郷從道殿

三

奉<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>旨<sup>ニ</sup> 八月<sup>ノ</sup> 軍艦<sup>ノ</sup> 明石<sup>ノ</sup> 進水<sup>ノ</sup> 式<sup>ノ</sup> 奉<sup>レ</sup>行<sup>ハ</sup> 皇太子<sup>ノ</sup> 殿下<sup>ニ</sup> 御所<sup>ノ</sup> 右<sup>ノ</sup> 上<sup>ノ</sup> 東<sup>ノ</sup> 宮<sup>ノ</sup> 武官<sup>ノ</sup> 公<sup>ノ</sup> 爵<sup>ノ</sup> 鷹司<sup>ノ</sup> 熙通<sup>ノ</sup> 被<sup>レ</sup>差遣<sup>ス</sup> 由<sup>テ</sup> 奉<sup>レ</sup>出<sup>ス</sup> 旨<sup>ニ</sup> 仰<sup>ル</sup>

訓令案

大臣 次官



軍務局長



軍事課長



造幣課長



年月日 主務

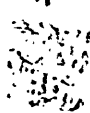
立案者

主事



校合

十一月



淨寫

録日





軍務局



第三四二號

未ル十一月八日神奈川縣下横須賀軍港

ニ於テ軍艦明石號進水式舉行ニ付

皇太子殿下御沙汰トシテ東宮武官公

爵鷹司熙通ヲ被差遣候條為念此

段及御通牒候也

明治卅年十月卅日

東宮職

海軍省

御中

第四九二号

東宮職

1661

四二〇七号

主事



淨馬

發付印



校合

十月二日

年月日

主務

立案者

大臣

次官



軍務局長



造船課長



課僚

軍需課長



訓令案

来ル八日午後之時横須賀軍港に於て軍艦明石  
進水式舉行ニ付事務是支ナキ向ニ參觀隨  
意也

明治三十四年十月二日

海軍大臣

法  
官

在東京各廳長  
官

1663



明治三十四年十一月二日 海軍次官  
東京帝國大學総長宛

四三〇一三 案

来ハ、軍艦明石進水式、自工科大学造船学科及機  
械工学科、學生等、凡以有名學部、研究上参考、爲メ  
參觀方、爲メ、東京帝國大學総長、ヲ、照會、有シ  
ル、旨、善ク、又、十、年、分、回、答、爲、事、多、ク、在、ル、事、志、ス、ル、事、多、ク、  
以、上、進、出、也

但學生指導、爲メ、同大、學、助、教、授、熊、倉、達、善、様、出、遣、  
シ、テ、有、ル、也

明治三十四年十一月二日 海軍次官  
樺太司令官長宛

1665



主事

校合

淨寫

發付

十月二日

年月日

主務

子

立案者

大目次書

有正奉公多能昭昭在在也武為年之際  
依紅智之陛下也臨切多生凡身氣標在費  
車財外伴等之生也生也生也生也生也  
為其合格之無法下商中出之付也心者

每

頁

1667





稱復陳者其公

積功造新殿於

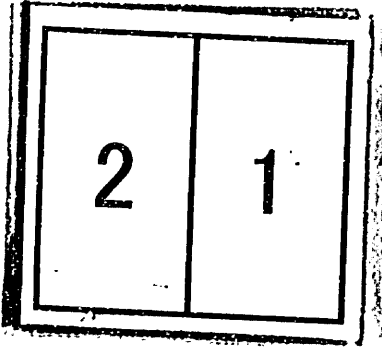
軍艦明名進水式

出舟行隱

1669

野紙

# 分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 版 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

依仁親王殿下臨

持取手車及び付うの書目

生駒十右衛門幸平の轉稿

元寇の汽車とて出張

生駒十右衛門の報告書

生駒の趣言上仕

慶長時刻 生駒 集存

生駒の生駒伝説

生駒の市街図

生駒の時刻表

生駒の歴史

1671 1670

生駒

慶正時刻 出集存

午之方 出俾功 能

出歸 勇之市 枝 漁 順

出登 車之時刻 願

出 爲 出 志 分 行 可

出 罪 始 之 出 卷 之

出 出 出 出 出 出 出 出

十有二日

丹羽 松 隆 家 令

未 岐 海 軍 智 庫 取

至急

軍務司

武第一七五號

造松原



侍従右馬頭高橋

右来ハリ横濱船造船所ヨリ横濱軍艦附石  
進水式挙行ニ付横濱船造船所ヨリ横濱軍艦附石  
系船ヨリ其船ハ右進水ニ至ル成リ今午也ヨリ也  
備

明治三十二年十月六日

侍従右馬頭高橋

村

侍従武官長科

海軍大臣後藤西河送致

1672

官  
内  
省

初稿の件ハ不取敢電也  
後ヲ次ニ通報シ

置ケリ

ナリ

加藤 卯吉 印

1673

原應記入云々

主事



淨寫

校合

發付

十一月五日

年月日

主務

立案者

大臣

次官



人事課



主任課僚



經理局長



第二課長



# 訓令案

来日横須賀軍港に於て軍艦及び潜水  
式艇の存数列スヘシ

昭和五年十一月五日

大臣

軍務局長

支那

要

目

1674  
1675

本件ニ関  
支那ノ事  
十一月

及歴紀入る

立案者

課係

外内

町長

河内郡

石進水

12

頁

1674  
1675

本件ニ要スル旅費ニ軍務局配付豫定ヨリテ

支弁ノ集

十月五日

經理長代理





四三三

主事



淨馬

發付切符後手長



校合

土月八

年月日

主務

立案者

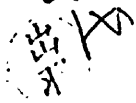
大臣



次官



軍務局長



造船課長

出



進水命令書案

明治三十七年八月軍艦明石ノ構造ヲ始メ今ヤ艦體

成ルヲ告ク係テ茲ニ之ヲ進水セシム

明治三十年十一月八日

海

軍

参 照

軍艦明石(丙号四号艦)船背骨材据付三十七年八月

六日(十)

横領第三六三土号)報告

1678

軍令部長

次長

第一局

主事



校合

淨寫

三月六日

發付

年月日

主務

立案者

大臣

次官



軍務局長

軍事課長



造船課長

造船課長

指令案

横鎖第九八九号 軍艦明石艦装部金属製  
木製之改正ノ件認許ス

明治三十一年三月廿一日

海軍

1679

横領第九九號

海軍

軍艦明石艦裝部金屬製之水製之改正方上用

軍艦明石艦裝部木材、箇所金屬製之改正

方去明治二十八年五月官房第一五八八号訓令

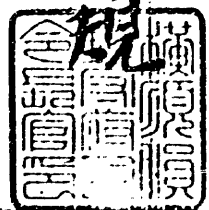
依り走々看手美処別紙、産々記載ノ通り、理

由ニ付水製之方利益ト存考間在、分ニ限リ水造

御認許相成度此般上申矣也

明治三十一年三月十九日

横濱賀領守府司令長官 殿 是員 規



海軍大臣 侯爵 西郷 從道 殿

舷門梯子

鉄製亜鉛鍍ノ者トスレハ亜鉛剥脱シ錆斑ヲ顕出シ体裁悪シク且ツ小  
蒸汽船端舷等ニ接觸シ屈曲スルノ害アリ又階段及上下プラットホームニ  
適宜ナル防滑方法無之キ為メ昇降ノ際甚ク危険アル而已ナラス舷梯  
重量木製ノ者ヨリ凡ソ三倍位多クシテ取扱ニ不便アリ是等ノ弊害ハ実  
地軍船須磨舷梯ニ徴シ明ナリ

食器棚

金属製ノ者トスレハ富士ハ島ニ備フル如キ薄葉亜鉛板製ノ者ト同  
一ナラン然ル時ニ其外見甚ク清淨ヲ欠キ引劣シ立テ合ヒ等不エ合ヒレテ  
僅々物ニ打觸レハ忽チ凸凹ヲ生シ引キ出シノ出シ入シニ差支ラ末スノ甚ク  
リテ木製ノ者遠ニ優ル且ツ棚ハ通シテ少数ナルモノナレバ散テ火ノ氣ヲ導  
引スルノ燃料トモ成ルベカラスト思テ

二五

衣服箱、手巾箱

薄垂鉄板若ハ亜鉛板ヲ以テ輕便且ツ廉價ナル者ヲ製造スルハ  
目下尙難事業ナリ

寢臺ノ手摺

艦船ノ寢臺ハ極メラ其巾狹小ナルカ故ニ其手摺ヲ金屬製トスル  
時ハ直接肌ニ觸ル、嫌アルヲ以テ鉄製寢臺ヲ備付ル場合ニ於テハ  
必ス一枚ノ木板ヲ手摺ト蒲團トノ間ニ介挿スルヲ例トス左スレハ手  
摺ヲ金屬製ニスルノ必要ナキガ如シ

洗面臺

従来材料倉庫貯藏品中ニ木製ノ者數個有之ニ付右ヲ使用スル目  
的ニ依ル

書目 棚

試ニ之ヲ鉄板厚一ミリヲ以テ製造スルニ其重量ニ於テ二倍又代價ニ於

テ二倍半以上木製家ノ者ヨリモ相嵩ニ到底利害相償ハガルモノト思  
考ス

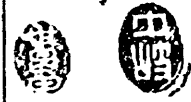
海軍

1683



陸軍省  
三十七号

主事




三十一年八月八日起案


發付日

八月廿一日

大臣 次官 


軍務局長 

軍事課長 

主任課僚 

經理局長 

第二課長 

第一課長 

軍艦隊名義仕長委員以下之予左記ノ人

訓令  
令  
安  
本

海軍省



1684

海軍

員選抜ノ上横須賀鎮守府へ派遣スヘシ

明治三十一年八月十三日

海軍大臣

呉鎮守府司令長官

兵衛 三人

内 半砲兵一人 半水雷兵一人  
按針手二過天者一人

船匠手一人

機関兵衛五人

筆記 一人

二等信号兵一人

二等機関兵八人

二等主計 一人

三三三

訓令案

別紙一通 若發等底司 令長官へ及訓令  
此旨心得へ

明治三十一年八月十三日

海軍大臣

横濱鐵道會社 令長官

海軍

1686

明石解禁不各負附トシテ各負配置

相成度上申

軍船明石工事目下進々道接ニ九記、  
人負同解禁不各負附トシテ必要ニ付是領禁  
府ヨリ配置相成候様致度此段上申候也  
明治二十一年八月六日

横領賀領寺府司長官殿自島



海軍大臣候爵西郷從道殿

八八日

直曹

三人

内 針手一人、書小僧兵一人

船匠手

一人

楫匠長曹

五人

一三曹信歸兵

一人

一三曹楫匠兵



八人

筆手記

一人

一三曹主厨

一人

軍令部長  第一局 

主事



淨寫

校合

發行 

土井 

年月日

主務

立案者

大臣



次官



軍務局長



造船課長



課僚



軍事課長



機關課長



兵器課長



指令案

横鎮第三五二四号一庫艦明石諸室配置改正

件認許ス

但後部甲乙丙丁砲架並及フール口入口  
左記通り及正ス

軍令第四六〇号

一

一

1689

明治三十二年十一月二十五日

洋  
員

一後部四十七三三砲隊兼通路ハ一時フーゴ内ニ引揚ケフーゴ内ニ更ニ右四七三三砲ニ配附スルノ性ヲ互トナス

一フーゴノ口ハ現今ノ倍ニテハ狹隘ニテ浮葉供給ニ不便ナリト認めルニ自現今ノモノニ倍ノ大キサトナシ兩用キトナス

横鎮第三五一四號

造修録

軍艦明石諸室配置改正上申

軍艦明石諸室配置之義軍艦須ノ艤装ノ結果  
トシテ別紙ニ依リ計画図面(甲番)ニ変更シ要スル部  
公有之候ニ付改正致度條御認可相成度此段上  
申候也

明治三十年十月十四日

甲國田國旗

圖面以テ製圖等ニ格納

付司令長官代理

將東郷平八郎



道殿

殿内ヲ以テ取賄フ者ニ責テ為志申渡也

海軍

1691  
1692



造務録

横領第三五一四號

軍艦明石諸室配置改正上申

軍艦明石諸室配置之義軍艦須ノ艤装ノ結果  
トシテ別紙ニ依リ計画図面(甲面)ニ変更シ要スル部  
公有之候、付改正致度條御認可相成度此段上  
申候也

明治三十年十月十四日

甲圖(旧圖)様々

横須賀鎮守府司令長官代理

海軍少將東郷平八郎



海軍大臣侯爵西郷從道殿

追テ本文改正ニ要スルノ費ハ定額内ヲ以テ取賄フ者ニ其条為志申渡也

1691  
1692

「ゾー」下諸室移動ノ理由

設計當時ノ面々ニハ機関長ノ寢室他士官ノ寢室ト殆ト  
同一ニシテ寢台ノ外「ゾー」ヲ設ケタル等ノ處機関長ハ事業  
服ノ終休息ヲ要スル「ゾー」依リ「ゾー」ヲ要スルト「ゾー」付  
主艦ニモ其社置ヲ要スルニ依リ士官室ヲ少シク後部ニ進メ士  
官室ト副長室トノ間ニ機関長寢室ヲ作り從テ他諸士  
官室ノ變動ヲ要ス

後部中甲板諸室移動ノ理由

後部中甲板ニ在ル士官厠ハ設計圖面ニ依レバ眞行「ゾー」ト  
以上モ有之士官次室ハ甚ダ狭ク而シテ洗面所ニ對シ舷ニ在  
ルノミナラズ諸室前面ノ境界凸凹有之往來不候ナルニ付  
右等ノ不候ナル箇所ヲ改正シ且ツ又水雷室ニ有之至計庫ヲ

○  
除キ其部分ニ設置スルヤ

前部中甲板諸室改正ノ理由

設計番ニ准士官寢室四ヶ所ノ處軍艦須磨ニ於テモ嘗テ  
水雷長ヲ増員シタルカ爲メ新ニ壹ヶ所ヲ増設シタルニ付其艦  
ニ於テモ談室五ヶ所トナスノ必要アリ

諸倉庫變動ノ理由

設計圖面ニアル発電気室ハ発電機械ノ操舵機室ニ移サレ  
タルヲ以テ不用ニ属セリ依テ是ヲ糧食庫米庫准士官倉  
庫ニ充テルヤ

造船課長

横造第七〇七號

事形明在法室願直改老方上事  
什事生老方二三号は所疑之報了  
原右別紙之通一理由之其系出  
系古所分付あり及由是考之也  
照得三十五年十月廿六日  
山口格造長海軍老能教本

佐野重三郎海軍老能教本

軍造第七〇七號



1695

理由

第一魚形水雷取入ノ方法ハ軍艦須磨ト同シク右舷二十四番  
二十五番間ノ外板ニ取入口ヲ穿テ軌道ヲ以テ取入ル、設

計ナリ

第二後部四十七ミリノ彈藥ハ十八番十九番間ニアル十五拇彈

藥庫入口ヨリ水雷室ヲ経テ「ア」ニ引揚ゲ「ア」下ニ於

テ配送スルカ又二十四番二十五番間ニアル十二拇彈藥庫

入口ヨリ水雷室ニ引揚ケ機械室「ケ」リングレノ兩舷ニ浴ヒ三

十八番三十九番間ニアル機械室風入筒ノ中央ヨリ甲板要

具庫ト詔入シアル所へ更ニ引揚ゲ配送スルカ兩者何レ

ヲ取ルカ未ダ決定シ居ラズ何レニ致スモ甲板要具庫ヲ

廢シ其処ニ「ハ」ツチヲ作り中甲板ト上甲板トノ交通ヲ便

ニセカレバ今日ノ低ニテハ二十五番ヨリ六十八番迄ノ間一ヶ所

海

區

モ中甲板ヨリ上甲板ニ出ル口ナシ

第三「パイプ」入口ハ現今ノ低ニテハ狭クシテ埠葉供給ニハ不便ナレ

バ現今ノモノ、ニ倍トシ両開キニシテ平常ハ其一方ヲ使用シ

一方ハ閉鎖シ置ク積ナリ副長機關長最前ノ「バルクヘッド」ハ

既ニ出来シ居レバ改造ハ頗ル不便ナルノミナラズ「ボラー」

杯アリテ眞行ヲ減スルモ余リ交通ノ候ヲ助クズ

第四機關師工場ニハ其何ノ「ゾッキライト」ヲ供ヘ附クル筈ナレ氏

未ダ「マスト」ハ「ヘルム」シケナルニ等ノ装置決定セガレバ「レーズ」

杯据付ケタル上適宜ノ位置ヲ撰ミ艤装スル積ナリ

第五「ブラクスル」内ニハ百三十三人中甲板前部ニハ八拾七人中

甲板水雷室ニハ六十人合計其百八拾七人ノ兵員ヲ起

卧セシノ得ル筈ナレ氏「ボーン」イステユウブ「フアヤー」モン「電線」等

ノ為ノ妨害セラル、モノ一割位ハアルベシ此不足ノ分ハ機

械炭罐室「ケーミング」ト石炭庫トノ間ニアル通路及石  
炭庫ノ上部等へ充分配置スル「」ヲ得ル見込ナリ

133  
81  
66

280

1698

達磨課長

横鎖第三五二四号ノ以テ上申有ル可般明石  
諸室配呈改正ノ件、右左ノ席ニ業初改ニツ条  
ノ取調ヨリ回テ左ノ申付  
明治三十四年十月二十日 課長

横鎖製造所長

- 一 奥形水雷取入ノ方法如何
- 二 後部四等七ノリ彈葉ノ通路如何
- 三 入口ノ数ハ一個ノ計畫ナシトモ彈葉供給頻數若干  
ハ申付左右二個ニ増シ副長室及極岡長室ノ奥行

製造第三二二號

一

二

1699



海軍

ヲ減るルコトニ致シ度工事上ノ都合如何

四 機關士工場ニハ光線注ハノ方法ヲ設ケタシ

五 フォクスル内及中甲板上ノケルースクォーターニハ何名

ノ兵員ヲ起卧セシメ得ルヤ

1700

官房第五〇三五

主事



二十五年十一月十五日起察

發付

十一月九日

大臣代理次官代理

軍務局長代理

軍事課長

人事課長代理

主任課長代理

指令

横領第四六〇四号の同軍艦明石取扱方ノ件

海軍

左ノ通心得ハシ

一准士官以上ノ人事ハ吳鎮守府ニ於テ取  
扱フモノトス

二同ノ通

明治三十三年十月廿九日

官房第五〇三五号ニ

訓令五九六

軍艦頭石取扱方ノ儀ニ付扱務所長鎮守府司令官  
長官月ノ内ニ對シテ前紙ノ通及指令ニ應  
ジテ此旨心得ハシ

明治三十三年十月十九日

海軍大臣

吳鎮守府司令官

會事課 (上彦)

横鎮第百六十四號

軍艦明石取扱、就キ伺

今般内令第九十二號ヲ以テ軍艦明石人負ラ定メ  
テ本府艦装委員、夫々補職相成候處左記  
各項、備見、通取扱可然哉一應伺出候也

- 一、准士官以上、人事ハ本府、於テ取扱フコト
- 二、下士以下、人事ハ本府、外、總テ本府、於テ取扱  
フコト

明治三十二年十二月十四日

横須賀鎮守府司令長官 鮫島貞



海軍大臣山本權兵衛 殿

海軍

主事



淨寫

校合

發付月

二月二日



年月日

主務

立案者

大臣 次官 (系孫)

軍務局長



造船課長



兵器課長 蓋印

指令案

橫鎮第四〇三号 軍艦明石發電機其他位

置变换件認許

明治三十二年二月三日

海軍

至急

横濱第20乙 號

兵器課

重形明石発電機其他位置变换方上申

軍艦明石発電機機位置变换方義容各年八月横

鎮才六八號上申未公四月官房才一五五七號以御認

許相成夫処尚不都合、廉発見夫、付別紙造取

廠長意見見、通各機、位置变换、要、付御認

許相成度此段上申也

明治三十二年一月廿一日

横濱實業守衛司令長官男爵相浦紀



附名圖書、製圖書

抄

照

海

軍

1705

1706

1706-2

王急

横領第20乙 辨

兵務課

軍艦明石丸電機其他位置變換方上申

軍艦明石丸電機位置變換方義容各年八月横

領才六號上申未公四月官房才一九五七號以御認

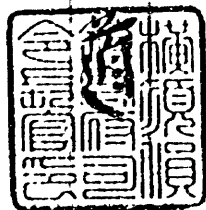
許相成美処尚不都合、廉丸見エ夫、付別紙造取

廠長意見、通各機、位置變換ヲ要エ夫、付御認

許相成度此假上申也

明治三十二年一月廿一日

横領賀鎮守司令長官男爵相浦紀



海軍大臣山本權兵衛殿

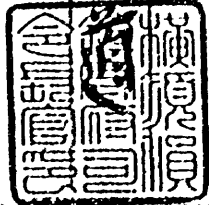
1705

1706

1706-2

海軍

相浦紀



六方上申  
義家各年八月横  
五七辨以御認  
大付別紙造御  
要事付御認

1705

1706

1706-2

寛政八年トアルハ三十年一月然  
誤リナシ



軍艦明石發電機位置變換方意見

軍艦明石發電機位置之我員、前部防濟甲板  
上、据付ルノ計畫ヲ戰時彈害ヲ蒙ルノ不利アルヲ以テ後  
部機房機室、換裝方并、發電機三基ノ内一基ヲ  
二百「ア」ノモノニ變換方上申ノ未官房第一五七号  
ヲ以テ承認許相成候然ルニ發電機ノ感觸ノ依リ操  
艇機室ニ四維針盤ヲ備付ル能ハザルハ一ノ欠点ニシテ遺  
憾不敷ノ有尚ホ熱方ノ至要機房機室内三基ノ  
發電機ノ内中央ニアル二百「ア」ノモノヲ汽機室内空氣  
壓搾唧筒及空氣蓄留器ノ位置ニ移シ空氣壓搾唧筒  
及空氣蓄留器ハ操艇機室ノ左舷側ニ据ヘ而シテ同室中

突々左舷ノ發電機ヲ搦付ル様變換賣テ二百ア  
ペアノモノノミヲ以テ揚彈其他ノ使用ニ搦飛機室ノ  
發電機ニ基ハ曩時ト云氏自昼ハ使用セサニ  
支ハナキ有爰ニ四維針盤ヲ搦付ルヲ得ルニ依リ  
甲乙両面ノ通一各機ノ位置變換ヲ要ス  
租界件ト依リ入費ノ増額ハ要セザル見込ニ有之矣

明治三十二年 月

横濱海軍造船廠長 山口辰彦



供

入事

水

軍務

軍令部

明治十八年八月

明石公試執行之報告

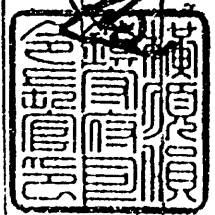
軍艦明石新造工事粗末落成致電二月本月

七日ヨリ公試執了可致ガテ艦形先修試檢

査規則第十三條ニ依リテ報告仕テ也

明治三十三年三月

横須賀艦長官長官相浦



造船課

海軍大臣

兵務課

軍務課

海軍大臣山本權兵衛

次長

第一局

海軍

軍務局

供覽  
系係

軍務局長

造船課長

横鎮第一二九〇

軍事部長

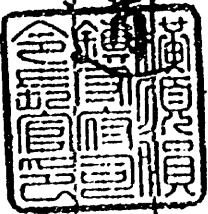
機關課長 山本

羽石 渡長、引渡報告

軍艦 羽石 新造 工事 竣工 候、付 昨日 三月 廿 告 船 廠  
長 羽石 副長、引渡 了 候、付 此 致 及 報告 候

明治三十三年三月二十五日

横須賀鎮守府司令長官 野島 相浦 記



海軍大臣 山本 権兵衛 殿

經理局長 村上

第一課 玉林

勝

第二課 福元

軍令部長 鶴岡

長 伊 第一局

1710



供覽



軍務局

軍務局長



造船課長



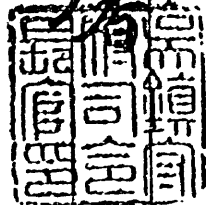
英漢第一三二七

報告

軍艦明石三月三十日授受終了此旨  
本艦副長ヨリ報告有之候奈此致  
報告候也

明治三十二年四月一日

吳鎮守府司令長官男爵井上良毅



海軍大臣山本權兵衛殿

海軍

軍務局

供

御

御

造

造

造

軍

軍

軍

明

明

明

明

明

明

明

四月廿九日進

御

御

副

副

副

大

軍艦明石 届仕候也 艦装完結候條此段御

明治三十二年四月二十九日

明石艦装委員竹内平太郎

横須賀鎮守府司令長官男爵相浦紀道殿

人

水

海軍